探訪 ながら 78

那珂川町郷土史研究会

裂田溝（さくたのうなで）5

裂田溝を造ったと伝えられている神功皇后を祭る伏見神社は、山田区にあり、一の井堰の前に建っています。神社前の那珂川の川べりに、しめ縄を張った大楠と石像があります。ここは本宮（もとみや）さまといい、慶安元年（1648）、筑前二代藩主黒田忠之公のときに現在の位置にお社（やしろ）を建立するまで伏見神社があった所です。現在の拝殿は、天保4年（1833）に再建されています。拝殿正面の「伏見宮」の御神額は、享保3年（1718）、江戸幕府八代将軍徳川吉宗の時代に奉納（ほうのう）されたものです。また、拝殿にはいくつかの「なまず」の絵馬がかかっていますが、絵馬には次のようないわれがあります。地元では神功皇后が三韓（現在の韓国）遠征の際、なまずが現れて船を先導し無事帰還することができたといわれています。それによりなまずは、神のお使いの魚として大切にされるようになりました。山田では、現在でもこの風習は残っていて、なまずを捕獲したり食べたりする人は見かけません。なまずは「白なまず」といわれる皮膚（ひふ）病にも効（き）くという民間信仰と、神話に言葉のあやも加わってか、治癒祈願になまずの絵馬を奉納する人が多かったようです。伏見宮は町内の神社の中で、絵馬の数が一番多く、弘化4年（1847）以後のものが三十六歌仙を含め大小数多く残っています。

毎年7月14日の祇園（ぎおん）祭の夜、拝殿で行われる岩戸神楽は、昭和29年12月13日に「福岡県無形民俗文化財」の指定を受けています。18番ある舞の中でも「荒神（あらかみ）」と「問答（もんどう）」は鬼が拝殿を所せましと暴（あば）れまわる勇壮（ゆうそう）なものです。鬼に抱かれた子どもは健（すこ）やかに育つという言い伝えがあり、当日は、近郊からの子ども連れの参拝者で賑わいます。また、7月31日は夏越（なごし）祭が行われます。古来から茅（かや）には神霊（しんれい）が宿るといわれ、茅の輪をくぐることから輪（わ）ごしともいわれています。1年間の疫病（えきびょう）や災難（さいなん）から身を守り、平穏（へいおん）に厳（きび）しい夏を過ごすことができますようにと、茅の輪をくぐってお参りします。

その日の夕方は「除蝗祭（じょこうさい）」の祭典も行われます。

この祭りは虫追いごもりとも言われています。紙に五穀豊穣など祈願の文字を書いて笹竹に結び付け、笛（ふえ）、鉦（かね）、太鼓（たいこ）を打ち鳴らし、笹竹を田んぼの畦に立てながら裂田神社まで巡るものです。裂田神社の拝殿では※直会（なおらい）が行われます。11月15日に行われる「火たきごもり」は、今年、成人式を迎えた男子が、那珂川の渕でみそぎ（水に入って身を清めること）を行い、境内に高く積まれた「まき」に、御神火で火をつける神事です。

古老の話では、出雲大社（いずもたいしゃ）に旅をされた神々を迎える時、目印になるように、火を焚（た）くといわれています。各所で火たきごもりは行われているようですが、みそぎの神事は伏見神社だけに伝承されているようです。

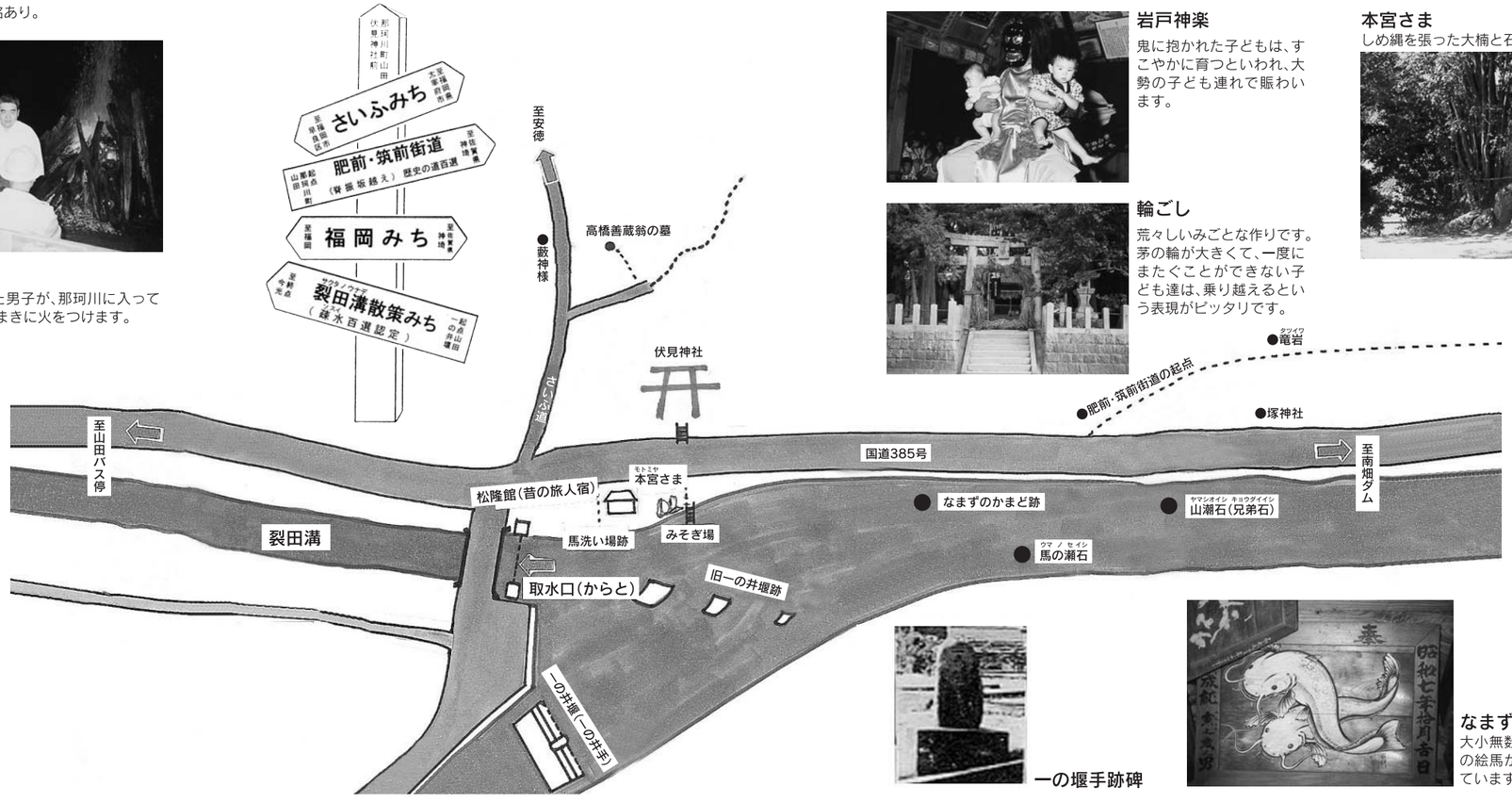
次号は、神社前を起点とする街道筋を紹介いたします。

※直会
祭事が終わって供え物のお酒などで宴会をすること

伏見宮　御神額
享保3年（1718年）銘あり。

火たきごもり
今年成人式を迎えた男子が、那珂川に入って身を清め、御神火でまきに火をつけます。

伏見神社・一の井堰（いぜき）周辺



岩戸神楽
鬼に抱かれた子どもは、すこやかに育つといわれ、大勢の子ども連れで賑わいます。

輪ごし
荒々しいみごとな作りです。茅の輪が大きくて、一度にまたぐことができない子ども達は、乗り越えるという表現がピッタリです。

本宮さま
しめ縄を張った大楠と石像があります。

一の堰手跡碑

なまずの絵馬
大小無数のなまずの絵馬が掲げられています。